
神靈伝説

千

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神靈伝説

【Zコード】

N2477F

【作者名】

千

【あらすじ】

第一章 - 昔々、神々がまだ人と対話し、人を助け、人を愛した時代、この大地にはまだ神々が存在した - 破壊と再生の伝説、それは、尊き子供たちから始まる。「さて、気合いや、気合い！頑張ろか！」

序章

昔々
神々がまだ
人と対話し
人を助け
人を愛した時代

この世界には神々がいた

しかしある時
傲慢な人々は
神々を殺め始めた

その頃

万物の女神と
崇められていた
二人の姫君の一人が
人々と共に
神々を

殺めていつたものだから
神々は
逆らう術もなく
ただ殺されてゆく
ばかりだった

- オノレ ヨクモ我ガ子ラヲ -

最初の神は

最後のチカラで
その憎しみで
万物の女神の
もう一人の姫君に
滅びと再生のチカラを
与えた

この二人の姫君が

後々

ハカイシン

と呼ばれることとなる

人の子である

シャーン・・・

暗闇から鈴の音が聞こえてくる。それは弱々しく、けれどもその音は心地が良かつた。

次に聞こえて来たのは優しげな人の笑い声だつた。暗闇にそつと広がり、余韻を残して消えた。

突然目の前に少女が現れた。それは本当に突然、なんの前触れもなく、起こつた。

少女の髪は黒々として艶があり、癖がないそれは、床まで届くほど長かつた。服は、まるで平安時代の女房姿のようで、頭には豪華な冠が飾られていた。手は口元に添えられているから、顔ははつきりしてとは見えない。

しかし、その顔は怒りと憎しみで満ちていた。そのせいで、美しい女房姿も、豪華な冠も、あまり意味がないように思えてしまつた。視界の隅からそっと手が出てきた。それは白く、触りたくなるほど柔らかに見えた。

けれども、その美しい手の甲には、丸と棒線で描かれた太陽がまるでタトゥーのように彫り込まれていた。

少女の顔が怒りに歪む。

「なぜじゃ……なぜ人側につかぬ……あれほど醜い神の傍にあるのじや……！」

少女が叫んだ。その問いかけに答えるものはいない。ただその怒りの叫びが暗闇にこだますだけだつた。

「なぜ……なぜじや……！」

するとじどりからともなく声が聞こえてきた。しかしそれは彼女の問いかけへの返事ではなく、不思議な言葉だった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「おのれ……おのれえ……！」

少女とは別の呪文を唱える声が徐々に大きくなり始めた。タトウーの手が布で窓を拭くようにそつと視界を覆うように滑った。次の瞬間にはもう少女が消えていた。暗闇に沈黙が広がる。

「……そろそろ私も行きましょつか……」

呪文の言葉がそう呟くと、視界にあった手がふっと消えた。暗闇からは人の気配がすっかり消えた。

序章　I（後書き）

また中途半端なもん出してスンマセ〜。すぐ元通り戻します！

第一章、ソノイチ、お化け屋敷

神戸」という町は、歴史情緒溢れる町で、高価な建物が立ち並び、その中には各界の著名人の豪邸があることもしばしば。

しかし、例外もある

神戸の中心部である三ノ宮、元町からほど遠く離れた東灘区。このあたりには御影石といふとても材質の良い石があり、墓石等によく使われている。

そのおかげで昔はよく栄え、古代の天皇についての言い伝えが残っているほどだ。しかしながら、それ以外に大した特産品もなく、交通の便が悪いことも手伝って、徐々に錆び付いていき、明治になり開港してもさほど注目されなかつた。

そんな町には、人々に
「お化け屋敷」呼ばれる古い家がある。

アホらしいほどバカでかいその家は、江戸時代に出てくる大豪邸を思わせるもので、塀もバカでかく、庭も無駄にバカでかい。

そして、ボロい。

壁の漆喰は所々剥がれ落ちてしまつており、瓦屋根は割れ落ち、雨漏りし、床は抜け落ち、畳は腐りかけ、庭には草木が生えたままほつたらかしにされていた。

ぼろいんやなくて、手入れしてないだけやろ。誰もが瞬間にそう突っ込むこの風貌。

威圧されるというか、なんというか。

そして、人間であるならば、誰もが素朴に思うこの疑問。

Q・人間は住んでるん? てかその前に住めるん?

A・勿論人間が住んでいますし、住めます。たぶん。
ちなみに言うと、普通の人は、こんな家に住まないで下さいね？

第一章、ソニー、お化け屋敷の人々。

「ふああつくしょん！」

一日酔いしたおじさんが風邪を引いた時のよつなくしゃみが田間に響き渡る。

「爺くさ…」

思わず突っ込む声が聞こえた。その後はなをかむ音と、微妙にする音が聞こえる。

それは大広間と呼ばれる場所からだった。

四、五十畳はあるうかと思われるその和室には、部屋の大きさに似合わないサイズの長机があつた。そんな机を取り込んで六人の少年少女達が朝食を食べていた。

「ほんま、爺くさいくしゃみの仕方すんなあ」

そう言つたのは少年で、今時の言葉で言うとイケメンだった。

先程の通り鼻は高く、まゆは太くキリッとしている。髪は色素が薄く、赤茶色っぽい。背丈は座つていて詳しくは解らないが、かなり高いことが分かる。年は十七、八才ほどと見受けられた。

服は水色のカツターシャツに中には白いシャツを着て、下は長いジーパンを履いていた。水色のシャツには左右に胸のポケットがあり、左にはボールペンやメモ帳が入っていた。

右手にはノートを持ちながら左手で器用にご飯を食べていた。そ

の内容は意味の分からぬ、言葉の羅列が小さな文字でびっしりと書いていた。その表紙には火加土 ひかづ 炎と書かれていた。

「何ゆうてんねん！炎にゆわれたないわっ！」

そう言い返したのはくしゃみをした本人、ではなく、小学高学年くらいの少女だった。

長い黒髪をポニー・テールにしてくくりあげ、前髪はなく、耳の前に一房残して切り揃えていた。ブラウスに赤いブレザーをきて赤茶色の、膝丈よりも短いスカートを履いていた。ブレザーの左の胸元には龍華 たちばな 科戸 しなと と書かれていた。その日本風の顔立ちに夏の新緑の色が良くなじんでいた。

「第一、もの読みながら」飯食べるなんて行儀悪すぎやー。」

鼻にしわを寄せながら、持っていたお箸で朝ごはんの子持ちししゃものお腹あたりをぶすりと刺した。

痛そうだ。

「そんなんゆうたあかんで、しいちゃん」

科戸の隣に座っていた美女が、娼婦のような甘ったるい声でなだめた。しかしながら逆効果だつたらしく、科戸は体を強ばらせた。

顔が青い

女はほつそりとしていて美しく、その顔はヨーロッパの人形のように整っていた。茶色く染めた長い髪を左にまとめて高い位置にくつていた。服は黒いタートルネックに赤いセーターを着て、薄茶色い、くるぶしまでのスカートを履いていた。

「うつさいわーつか、なんでうちの隣にあるねんー?」
「そんな細かいこと気にしてあかんでえ」

「うつさいわ、このオカマがあつー。」

「オカツ…」

以上の会話から分かる事。

- 一・科凹が極端に嫌つてゐる」と。
- 二・女がオカマであること。

そう。彼女は女ではなく、男である。

「オカママやないつ！ 棉津見わたみ 伯華はつか！ 心は女ー。」

伯華はそう叫ぶと持っていたお箸で朝ご飯のしじやもの腹をぶすりと刺した。

痛そうだ。

その言葉を聞いた科凹は口の端を上げて鼻で笑った

「心はつて事は、本物の女やなつて自覚してるんや無いの?..」

次の瞬間、伯華の顔が強張り、科凹を睨み返す。一触即発の空気が広がる。

根本的な原因である炎は、これはかなわんとも思つたのか、ノートを見るのをやめると急いでご飯をかき込んだ。

「一人共喧嘩したあかんよ」

そう言つて一人をなだめる声が聞こえた。

「千代ちゃん！」

二人は揃つて声を上げてその声の主のほうを見た。

声の主は一人の机の向かい側にいた少女だった。顔立ちは美しく、日本人形のように整つていて、髪は黒々として長く、緩く一つ結びしていた。

服はブラウスにセーターを着ていて、胸元に赤い蝶結びのリボンを付けていた。紺色のスカートを履き、紺色のハイソックスを履いていた。セーターの胸元には“天津原 千代”と書かれているバッヂが付いていた

「オカマなんてそんなんゆうたあかんよ」

「千代ちゃん…」

伯華は潤んだ目で千代を見た。感動しているようだ。科戸はおもしろくなさそうに腕を組んで眉を寄せている。

「確かに伯華ちゃんは女の子では無いけど、心は女の子だもの。それに、本物になろうと努力しているわ」

「…」

その言葉の次の瞬間には伯華は難しい顔をして黙り込んだ。科戸が楽しそうにニヤニヤとしている。

「あつはつはつ！」

突如重苦しい空氣を払つかのように盛大な笑い声が聞こえた。全員がそちらを向く。

「笑うなんてひどいで、怒ちゃん…」

ひどく意氣消沈した様子の伯華の視線の先にいたのは、男の子のよつな美少女だった。

黒髪をバッサリと肩のあたりで切つていて、今時の髪型、という感じがした。その髪にまるで元々セットだつたかのように、きりつとした目は少し小さめで、オレンジ色をしていた。まさに男の子のようだった。

服は白いカツターシャツに紺色のセーターを着て、胸元には赤と黒のストライプのリボンを丸く赤いブローチでとめていた。下は紺色のズボンを履いて、茶色いベルトで締めていた。セーターの左胸のあたりに“天津原 惣”（あまつばら くみ）と書かれていた。

「わりいわりい。余りにも千代のフォローがフォローになつてへんかつからよ。」

笑いながら恕は言つた。すると、千代は唇を尖らせて不機嫌そつな顔をした。

「そんな事あらへんもん。ねえ、伯華ちゃん？」

伯華は返答に困ったのか、ふいとそっぽを向いてしまつた。それを見た千代は更に不機嫌そうな顔をした。

「怒ちゃんつー…」

「なんでつちー?」

しばらくなつやつて言こ争つてじるのを呆れて見ていた炎は、チハコと壁時計を見やると、ぎょつとした。

「…おい」

「なに！？」

息も荒くそう言つた二人の形相はすこかつた。しかし、そんな事に構つている暇もなく。

「…時間、ヤバいんやないか」

その言葉で全員が一斉に壁時計を見やつた。そして全員が一斉に青ざめた。

彼らはそれぞれ小学校、高校、大学に通つてゐるのだが、小、高組は登校は八時三十分までなので、大学組もそれに合わせて登校している。それに、それぞれの学校が同じ敷地内にあるのも理由の一つである。そして現在の時刻は、八時二十分。家から学校までは三十分。

やばい。かなりやばい。

全員一斉に青ざめた顔のまま走り出した。腐つてゐる床を踏まないよう廊下を抜け、玄関までいくと、そこに置いてあつたそれぞれのカバンを持って靴を履き、扉を開けて走り出した。

「行つて来まーすつ！」

全員揃つていつたその声は秋の寒空に響き渡つて溶けていつた。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活（前書き）

「めんなさい。しばらく停滞しておつますた。すみませぬ。
これからさしあります…！ホント」と。すみませぬ。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。

「 で、あるからしてここ」の訳は“ジョンは泣いたが、再び笑つた”になるわけであつて…」

広い教室に女教師の声が響く。期末試験前の為か、皆真剣に取り組んでいる。中には目の人下にくまが出来ている人間もいた。そんな中にひとつ教室に入つてくる人物がいた。

抜き足差し足忍び足

「 という訳になるわけですが、天津原あまつばる 恕くみさん。ここを訳してください」

女教師がくるりと後ろを向いて仁王立ちになつた。こそこそしていた人影がすつと立ち上がる。それは怒だつた。全員の視線が集まる。黒板に書かれた文字をチラリと見やつた。

「 “こうしてジョンは幸せになりました”です。早川せんせ」

恕は何事もなかつたかのようにあつさりと訳してしまつた。早川と呼ばれた女教師も何事も無かつたかのように黒板に向き直る。

「早く座りなさい。他の人に迷惑です」

恕は早川の背中に右手で親指を下にしたジェスチャーをすると、

千代と共に教室の窓側の後ろの席に座った。

「はあよおさん、怒」

休み時間になり千代と一緒にしていると、怒の級友の一人が近づいてきた。

「よお、常磐。ちなみに今は十時だから全然早いことないで」

「ほつとけ！俺には早すぎるんや」

常磐と呼ばれた少年はそう答えると、口を大きく開けてあくびをした。

少年の名前は神富司 常磐。長身瘦躯の青年で、眉は太く、目は眠たそうに一重になっていた。黒髪を肩の辺りまでボサボサに伸ばしている。耳にはピアスが三つも四つも付いていた。服もあり得ない程に着崩していた。

常磐は、いわゆる不良であった。頭をポリポリとかくとまた一つ大あくびをした。

「つか、お前ほんまにあほやんな。遅刻すんならするで、堂々とすればええのに」「…それもそれで、駄目やで。きっと」

千代は的確な突っ込みを入れる。怒はうんうんと大きく頷く。常磐は怒ったように腕を組んだ。

「天津原さん、早川先生が呼んでるで」

その言葉に怒と千代の二人が振り向いた。教室のドアで少女がよ

んだ。一人は顔を見合わせる。言葉を発した少女ははつとした顔になる。

「あー」「めん」「めん。両方や、確か」

「どこに来いって言つとつたん?」

「英語科準備室や。一人共またなんかやつたん?」

「うん、ちょっと」

千代は怒をちらりと見やり、苦笑いしながら答えた。そのまま一人は教室を出て英語科準備室に向かつた。

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

キーンゴーンカーンゴーン

校舎に授業開始の合図が鳴り響いた。

まだ幼さが少し残る顔の少年は、この音が響くたびになんとも幼稚な音なのだろう、と思い、どうしようもない事はわかっているが、少し憂鬱な気分になる。

窓際にある席は、そんな思いをいつそう引き立ててくれた。

そんな姿に少年を好きになる女の子達もいたが、その恋が成就した事はない

「ま、待つて、待つて待つてー！」

まだ遠い位置から叫びながら少年のいる教室に近づいてくる声があつた。

そら、また幼稚なのが来た。今日は特に盛大だな。全く、あれは一步どころか一ミリたりとも進歩していないな。

少年は、その顔に似合わない憂いのため息をついた。

その表情に教室にいた少女たちは、一瞬にして目をキラキラさせ、それを見た少年達は怒りの炎を燃やした。

なんなんだ。俺がなにしたんだ。

憂いのため息をもう一度ついた、次の瞬間、教室の扉が大きな音を立てて開いた。そこには科戸が息をきらして立っていた。

「セーフ！」

「どこがだ」

少年は冷静に、鋭く突っ込みを入れた。科戸は眉を寄せ、頬を風船のように口を膨らませた。

「そんなことあらへんもん！ 16秒しか遅れてへん！」

「それでも遅刻は遅刻だろーが

「うつ…、そ、それは…」

痛いところを突かれてしまい、科戸はうなだれてしまった。少年はため息をつく。

ああ、今日もため息しかつかねえんだろうな…。

少年の名前は三輪山姫彦みわやまきひこといつ。

十一歳である。

東京出身で、五年前にこの界隈に引越ししてきた。

容姿端麗、成績優秀、運動神経も抜群で、手先が器用で何でも出来てしまふ、まさしく文武両道だった。しかも家柄も良く、P社社長の跡取り息子であり、会長の愛孫もある。いわゆるサラブレッドと呼ばれる人間の種類だった。性格は自己中心的な面が多いが、その美しい容姿と、頭がよくきれる事がそれを充分に補っていた。

「うう…」

科戸がまだドアの前で落ち込んでいた。教室にいた担任がなんとか席に向かわせる。

ランドセルを教室の後ろにあるロッカーに入れると、窓際の真ん中の席に腰を下ろした。大きくため息をつく。

くすくすとクラスの一部から笑い声が聞こえた。意地の悪いものだつたが、科戸は聞こえなかつたのか、隣の女の子と楽しそうに話していた。

笑い声を上げた子供は少し悔しそうに科戸を睨み付ける。

姫彦は笑った子供たちの顔を、感情のない、冷ややかな目で見ていた。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。（後書き）

あい。中途半端に終わりました。次は、うーん…（#+_+）年明けまではたぶんないです。そんなわけで、みなさんよいお年をー（
^ ^ ）／ ¥（^ ^ ）

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。二

「阿呆が。あれほど遅刻すんなつたろうが。何回目だ」

「四十六か…あいでっ！」

本当に答えた科戸の額を姫彦がペчиりと叩いた。いい音がなり、痛かつたのか、眉をひそめて額をさする。二人は南にあるサンテラスのカフェテリアで話していた。サンテラスは屋根から扉までが全てに置いてステンドグラスで造られていた。約百年前からあるらしく、かなり凝ったデザインだ。この学校がどれほど裕福で歴史があるのかがうかがえる。

「いたたたた…。叩くことないやん…」

「うるせえ、お前がわりいんだろうが」

「む…」

科戸はいまだに不機嫌そうに額をさすっていた。

「さて。んなこたあどうでもいい」

その一言で姫彦が真剣な表情になつた。科戸もがらりと表情を変える。

姫彦は、目の前のアンティークのよつた木製の机に置かれた、洒落たカップの紅茶を一口すすつた。そつと受け皿に置く。科戸は静かな皿でその動作を追う。

「実は、依頼したいつづつてる人がいる」

「へえ、うちらに？物好きな人もおんねんなあ」

先程より鋭さを増した科戸の双眸が煌めく。腕組みをして薄く笑つた。

姫彦はそういう表情をする科戸は嫌いではなかつた。まあ、普段の表情も特に嫌いではないのだが。ともかく、それからは何でも来い、といつ自信に満ちた物を感じるのだ。

「依頼者は

科戸は聞こうとして言葉を切つた。

目だけ動かして周りを見た。つられて姫彦もつられて見る。カフェテリアには他にも生徒が同じようにお茶をしにきていた。一人は目配せをした。

『依頼者は誰なの?』

『俺の親父の個人的な知り合いだ。M社社長』

『ああ、あの人…』

急に意味の解らない言葉を話しだした一人に周りの生徒やカフェテリアの店員がひどく驚いた。

一人が話しているのは“ある仕事”をしている人間にしか通じない言葉だ。それは発音が極端に難しく、注意深く聞いていても解りにくい位の小さな音の違いを聞き分けなければならないものだつた。一人は騒ぎに構わず話しを続けた。

『了解。怨姉に伝えておくわ

『ああ、頼む。後、出来ればそちらで夕食を食べたいと思つ

『それも伝えておくわ。ところで』

科戸は言葉を切り、目の前に置かれていた冷めた紅茶を一気に飲

み下すと、ゆりべつと坂口目撃した。

「最初はぐー、じゃんけんぽん」

こきなり立ち上がり声を揃わせじゃんけんをした。結果は科円がぱーで姫彦がぐーだった。

科円が無言で勢い良くガッシュポーズをする。

「じゃ、払つとこてなー先出とつからーー。」

それだけ言い残すと科円はカフュテリアを出た。姫彦は小さくため息をこぼしてズボンのポケットをまさぐりながらレジに向かう。そこには頑固そうな老婆が肘掛け椅子に座つて本を読んでいた。かなり集中してこるよつて、じりじりとは気がつかない。

「はあさん、お勘定」

その言葉にやつと気づいたのか、姫彦の方を見た。いつとひしゃうに睨むと読んでいたページにしおりをはさみ、脇に置くと立ち上がりだ。

姫彦がレジに置いた伝票をちらりと見やると、それを数回弾くと側にあつたノートに書をこんだ。

「またあんたが払つのかい？」

お金を受け取り、おつりを計算しながら聞いた。すこしからかう口調だ。

「まあな。あいつ、金無いし」

「それだけかい？」

そう聞かれた瞬間、姫彦は押し黙ってしまった。老婆が意地の悪
そ「ひひひ、と笑う。

「惚れた弱みつてやつかい。ああ、面白い」

「……ばあさん長生きするぜ」

「うござつしたよつにこつた。こめかみを押されて頭痛に耐えてい
るよつだつた。」

「そりゃあ嬉しい限りだね。まだまだあつちにや逝きたくはない
んだ」

やう言つておつりを渡すて、老婆はかつぽうきのポケットからあ
め玉を一個取り出し、レジのテーブルに置いた。

「やるよ」

そし票をちらりと見やると、やうばんを数回彈くと側にあつたノ
ートに書かれていた。

「またあんたが払うのかい？」

お金を受け取り、おつりを計算しながら聞いた。すこしからかう
口調だ。

「まあな。あいつ、金無いし」

「それだけかい？」

そう聞かれた瞬間、姫彦は押し黙ってしまった。老婆が意地の悪

やうにひらひ、と笑ひ。

「惚れた弱みつてやつか。ああ、面白」

「……ばあさん長生きするぜ」

「ふんやつしたよつてこつた。」めかみを押さえて頭痛に耐えているやつだった。

「そりゃあ嬉しい限りだね。まだまだあつちにしゃ逝きたくはないんだ」

やう言つておつりを渡すて、老婆はかつぽげのポケットからあの玉を一個取り出し、レジのテーブルに置いた。

「やるよ」

そのあめ玉を手に取り見えてみると、それは料亭の一一番氣に入つている種類の、一番好きな味だった。

「この婆さんどこのまで知つてんだ……？」

田の前にいる老婆に一種の恐怖を感じながら、それをポケットに入れだ。

「どーも……」

かるく礼をぬいて、そのままじあ出でこいつとした。しかし、立ち止まる。

「やうやう、息子やんじよりしへな」

振り返らずに老婆にそれだけ言つて姫鶴はドアを勢いよく開け、

サンテラスから出た。

「平和だねえ…。まあ、それが一番なんだがね」

老婆は、姫彦が出て行ったのを見計らつたかのように先ほどの会話からは想像出来ない優しい声音になつた。

そしておもむろに立ち上がると、レジに向かい、その上に置かれた四つ折りの紙をそつと手に取つた。

「…」

しばらぐはじつと見ていた。しかし、小さくため息をつくと、紙をもう一度畳みなおした。

そしてそれを、かつぽつきのポケットに入れると、くるつときびすを返し、ドアに向かう。

「お婆ちゃん、どこ行くの？」

その場を通りかかったウェイトレスが老婆を引き止めようとした声をかける。

老婆は足を止めずにずんずん進む。

「やぼ用だよ。ほつとこてくれ」

そう言つと、サンテラスを出で行った。

老婆が出て行くと、引き止めようとしたウェイトレスがちよつと大げさにため息をついた。

それに気がついた他のウェイトレスが駆け寄る。

「どうしたの？」

「…お婆ちゃんが出て行っちゃったの」

「またあ？」

二人とも呆れた表情で、サンテラスにあるドアを見つめた。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。一（後書き）

ああけましておめでとおおげやござまああすつ！（＊。＊。ノヽ）
いやー、年開けましたよ。2009年ですよ。
今年もっ、小説にしつかりつゝー力をそいでいきたいとおもつ
あよひじの、

そんなわけで、また直ぐに更新出来ると思います。
きっとたぶんおそらくね。信用しないほうがいいよ。（マテ

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。三

「炎ー。ノート貸してくれー」

「なんのやー」

後ろから聞こえた声に、炎はノートにペンを走らせながら振り返らずに応えた。

炎が居るのは大学の教室だった。そこは比較的広い場所で、階段状に長机と長椅子が黒板を囲むように半円を描いていた。

「国学の山田センセ。前回休んでもうたからわからへんねや」「おー。いいで」

青年が隣にどかっと座る。炎は足元に置いてあつた、茶色のスポーツバックを机の上に置き、探っていた。

青年は神宮司

司（じんぐうじ

つかさ）といつ。十八だ。

産まれも育ちも御影、という彼は、家が神社である。そのため、国学や宗教学、言語学、はたまた日本古来の礼儀作法の専門学校に行つている。そんな彼であるが、家柄に似合わず格好が派手なのである。

服はだぼだぼのTシャツにジーンズ、靴はぼろぼろのスニーカー。髪は染めた明るい茶色で、根元が少し黒い。耳にはたくさんのピアスがつけられている。

これこそ現代の若者の代名詞ともいえる格好である。

「あー、あつたあつた。これやひ?」

炎がやつてから出しだしたノートを渡した。司がそれを受け取る。

「これや、これ。ちゃんと。明日までには返すからな」
「わい」

司はそう言って軽く手を上げるとその場から立ち上がった。そして扉に向かおうとしたその時、携帯の電子音が鳴り響いた。慌ててポケットから携帯を取り出し、ボタンを押して電話にでた。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。三（後書き）

また中途半端なところで終わってしまいました。なんかすいません。
かなり読みにくい節があると思いますが、これから先も読んでいた
だけたら幸いです。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活。四

司は、自分ポケットから聞こえてきた電子音に驚いて、慌てて電話に出た。

「はい、もしもし……ああ、あんたか……はいはい、で……」
解した

話を終えたのか、電話を切ると、炎の方を向いた。

「お前の家から資料請求や」「は？ 資料請求つて…依頼の話しさ聞いてないで？」

炎が怪訝そうに眉をひそめた。司が思いついたように笑う。

「ああ、資料請求つつても、怒からじやねえさ。姫彦からや」

炎は今の言葉で納得した。だいたい依頼話を持つてくるのは姫彦で、その時にだいたいの資料を揃えておいてくれている。おそらくその資料なのだろう。

「じゃあ、今日会議やな…。あ、その話し、まだ本部に行つてへんよな」「ん、多分。まだ正規にうなづくわけがないし」「よつしゅ」「やめ」

炎は強くガツツポーズをした。

『仕事』といつのは、必ずどこかの組織に所属しなくてはならない。その仕事についても報告しなくてはならず、その上、依頼料から八十パーセントも取られるのだ。たまたものではない。しかも、『仕事』で生活しているお化け屋敷の人々にとって、それはある意味死活問題なのだつた。

「ま、頑張れや
「おう！」

炎は元気に返事をすると、立ち上がり、教室を出ていく。ドアが閉まる音が響く。向ほじばりくその扉を見ていたが、めんどくさいうに頭を搔ぐ。

「……これでいいんですか、長」

司が、皮肉のこもった聲音で言つた。後ろから足音が近づいてきたのを確認してから後ろを振り返る。

「ええ。……上出来ですよ。ありがとうございます。司君」

そう言つたのは、年若い青年だつた。

背は高くやせ形で、黒いスースを着てゐる。顔立ちは美しく、しかしみずみずしい肌とは対照的な真っ白な長い髪を一つに緩く結んでいた。

「さて。仕事に戻りましょうか

そう言つて青年は後ろを向くと、教室の真ん中にある黒板の前に立つた。

細くて長いその腕をいっぱいに広げると、唯人には分からぬ、

短い言葉をつむぐと、彼の回りにつむじ風が巻き起しる。それが消えた時には、彼は消えていた。

沈黙が辺りを包み込む。

「…くずが」

司は吐き捨てるよつに言つた。しかし、その顔はすぐに苦笑する。

「俺も人のこと言われんよな…」

前髪をうつとうしそうにかきあげると、炎が先程出ていったドアを開け、教室から出た。

第一章、ソノサン、お化け屋敷の人々の生活 四（後書き）

すいません。更新できませんでした。今は不甲斐ないばかりです。
申し訳もたちません。

しかも、なんか総アクセス数を見たら、六百人超えでした。
千は、皆様が私のような人間の小説を読んでくださる、その寛大さ
に感服しております。
また近いうちに更新できたら…と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477f/>

神靈伝説

2010年10月15日01時28分発行